

原著論文

「内」と「外」の先住民 — 19世紀後半アメリカ合衆国インディアン政策と 先住民集団のカナダ亡命まで

岩崎佳孝

Off and on reservation Indians:
Sitting Bull's exile trail to Canada, 1876–1877

IWASAKI Yoshitaka

Abstract : Since the second half of the 19th century, most of the indigenous people of North America (Native Americans), who were forced into the integration process of “domestic” native tribes promoted by the United States’ ‘Peace Policy’ and to live on “reservations,” faced a crisis of the destruction of their traditional social systems. However, some Native American groups who resisted US Indian policy escaped from the United States and went into exile across the border in Canada.

This paper analyzes how and why a group of Lakota, one of the biggest tribes, which had lived in and moved freely and widely over the North American “borderlands,” embracing the Great Plains of the western frontiers in the United States and Canada, which provided an area for buffalo hunting, collecting, trading, and social intercourse, went into exile in Canada after putting up armed resistance to the US Army, forcing them into living on the reservation.

At the Battle of Little Bighorn in 1876, the largest coalition of Plains tribes in history, including the Lakota, defeated and annihilated the US 7th Cavalry led by George A. Custer. As a result of the battle, Sitting Bull, who was famous among the Plains tribes as spiritual chief of the Hunkpapa (a band of the Lakota) and who participated in the battle, and his band continued to be chased by the US Army, which regarded him as one of ringleaders of the battle. In 1877, his band finally went into exile in Canada.

We should not interpret this historical exodus of Sitting Bull and his band into Canada only from a historical but somewhat stereotyped perspective: one of the tragic stories of Native Americans who got robbed of and lost their land and were forced to move to an unfamiliar place. The case also can be interpreted much more easily as a compulsory move based on their own free will rather than a forced ejection or involuntary exile after having no land to live on in the United States.

This paper demonstrates that Sitting Bull and his followers crossed the US–Canada border because they, like many other Native American people in the late 19th century, still lived, in their mind at least, in the world of the North American borderlands; therefore, they necessarily found it hard to accept and adjust to US Indian policymakers’ ideas that limited and divided the vast land of the borderlands into frameworks or compartments, such as national borders, nations/states, and Indian reservations. Therefore, it was seemingly a very natural act for Sitting Bull and his followers to go to Canada not only because they were forced to escape but also to move freely back and forth in the borderlands with no natural borders to hunt, engage in social intercourse, and save their lives.

Key Words : borderlands, US Indian Policy, Canada, Native American, Sitting Bull

要旨：本稿は、アメリカ合衆国で19世紀後半から推進された北米大陸先住民（インディアン）の国家内への統合過程で、社会存亡の危機に直面した集団（部族）が、強制的国家統治に抵抗し国境を越え亡命した事例を検討する。

具体的には、合衆国＝カナダ国境を跨ぐ西部フロンティアの大平原地帯「ボーダーランズ（Borderlands）」を居住・狩猟・交易・交際圏とした先住民集団のひとつであるラコタ（Lakota）が、国内先住民集団の「保留地」入居政策を進める合衆国に対する武力抵抗の結果、カナダに亡命するに至るまでの事例を取り上げる。

合衆国史上有名な1876年の「リトル・ビッグホーンの戦い（Battle of Little Bighorn）」で、ラコタを含む先住民連合はジョージ・A・カスター（George A. Custer）が指揮する陸軍第7騎兵隊主力を全滅させ、合衆国に先住民戦争最大の敗北をもたらした。ラコタの小集団ハンクパパ（Hunkpapa）指導者シッティング・ブル（Sitting Bull）はその首魁とみなされ、彼の統率する集団は合衆国内で追討され、その後国境を越え、カナダに亡命した。

しかし巷間言われるようにシッティング・ブルのカナダ亡命は、大地を守る戦いに軍事的に敗れた先住民がやむなく外国に逃亡したという悲劇的な観点からのみ解釈されるべきではない。本稿では、合衆国が先住民に強いた「国家」「国境」「保留地」という枠組み内への包摂が、19世紀後半の時点でさえなお多くの先住民に全く異質で馴染まないもの、受け入れがたいものであり、シッティング・ブル集団のカナダ亡命は、本来の先住民が生きてきた「ボーダーランズ」的世界の在り様からみてきわめて自然な行為であったという解釈も可能であることを明らかにしたい。

キーワード：ボーダーランズ、アメリカ合衆国、先住民、インディアン、シッティング・ブル

はじめに

「カスター最後の戦い（Custer's Last Stand）」とも呼ばれる1876年のアメリカ合衆国における「リトル・ビッグホーンの戦い（Battle of Little Bighorn）」—先住民¹側の呼称は「グリーシー・グラスの戦い（Battle of Greasy Grass）」—は、合衆国と先住民の関係史でしばしば引用され、現在も多くの著作、映画やTVドラマ等で取り上げられ続けている。

北米大陸を南北に貫くロッキー山脈の麓に至るまで大平原が広がる西部フロンティア—本稿との関連においては現在の合衆国ノースダコタ、サウスダコタ、モンタナ、ワイオミング州、またカナダのマニトバ、サスカチュワン、アルバータ州に相当する地域—では、そこを生活圏とする北米大陸で最も大きな先住民集団（部族）のひとつラコタ（Lakota）、別称テトン（Teton）と合衆国の間に、「ブラック・ヒルズのための戦い（War for the Black Hills）」（1876～77年）が行われていた。

その戦争中に起きた「リトル・ビッグホーンの戦い」は、英雄的軍人として世間の寵児となっていたジョージ・A・カスター（George A. Custer）²が率いる合衆国陸軍第7騎兵（連）隊主力268名が、合衆国先住民政策に従わないラコタと、それと同盟するシャイアン（Cheyenne）およびその他の先住民集団の大宿営地を攻撃した際反撃を受けて全滅し、当時の合衆国に大きな衝撃を与えた、対先住民戦争における最大の敗北である³。

この戦いに参加し合衆国からラコタの首魁とみなされ、西部における敵性先住民の象徴的存在とさえみなされたのが、ラコタの下位集団ハンクパパ（Hunkpapa）の有名な精神的指導者シッティング・ブル（Sitting Bull）、ラコタ名タタンカ・ヨタンカ（Tatanka Iyotanka、「座り込む頑固なバッファロー」という意味）であった（写真1）。「リトル・ビッグホーンの戦い」の勝利にもかかわらず、合衆国に抵抗するこれらの先住民集団はその後約1年間、狩猟ができないため通常は宿営し春を待つ冬季にさえ、合衆国から追跡され続けた。これに屈し多くの先住民が次々と降伏する中、シッティング・ブルが統率するハンクパパ・ラコタ集団は、国境を越えカナダに亡命したのである。

シッティング・ブルはラコタ以外の先住民にも、そのカリスマ性でその名を知られ、敬意を受ける存在であった。

合衆国の侵略に対し白人を戦慄させる程の大きな勝利を収めた後カナダに去ったシッティング・ブルは、「わが大地」⁴を守るため侵略者である白人に果敢に抵抗するがついには敗れ去るといふ、北米各地で繰り返されたアメリカ先住民の悲劇的歴史で主役を演じる人物のひとりとみなされている。とりわけ、ついに国内に居場所を失い外国へ追われたという点で、その悲劇性は際立っている。このため彼は同時代から現在に至るまで、研究者を含む多くの人々から非常に大きな関心を寄せられ続ける人物となっている。

しかし、合衆国軍に追われるシッティング・ブルの集団は、何故直ちにカナダに逃亡せず、約1年の長い期間にわたって合衆国内を移動し続けたのであろうか。管見の限り、この理由について各史書では、シッティング・ブルの最も詳細かつ包括的伝記を著し評価されている二人の研究者アトリーとベスタルのもも含め、戦いに敗れ「わが大地」を追われ、カナダ行を決意したという以外の説明がなされていないようにみうけられる。例えばアトリーは「(軍の) 圧力を受け」、またシッティング・ブルの親族に取材した貴重な研究を行ったベスタルでさえ、単に「(シッティング・ブルは) カナダに行くことを決めた」と記しているに過ぎない⁵。

そこで本稿では、上記に提起した問題も含め、軍事的圧力にとどまらない他の事由の存在についても考察することで、19世紀後半から推進された合衆国の強制的で強圧的な国家統治が先住民社会にもたらした意味と、それに先住民集団がどのように反応し、その結果国境を越え他国に亡命するに至ったのかについて明らかにしたい。

1 19世紀後半の合衆国先住民政策—「平和政策」と「保留地」

先ず本節では、19世紀後半の合衆国の対先住民政策について概観しつつ、それがシッティング・ブルの属する先住民集団ラコタにどのように適用され、その政策内容が当時の先住民社会の実態といかに乖離していたのかについて確認する。

南北戦争(1861～65年)後西部への新たな拡大を目指した合衆国では、西部フロンティアから太平洋岸に至るまでの広大な地域の各地に散住し、自在に移動する各先住民集団の存在は、今後ますます増加することになる白人の進出にとって大なる障害となっていた。白人の進出に示されるであろう抵抗への対処も、なされなければならなかった。

合衆国内の各先住民集団は、19世紀初頭の合衆国最高裁判所によるいわゆる「マーシャル三大判決(Marshall Trilogy)」により、それぞれがあくまで合衆国に従属的ではあるものの、州とは別個の「国家内自治国家」として一定の主権を認められていた。それゆえに、合衆国は理論的には一妥結が成らない際にはしばしば戦争行為によって先住民に受容を強いてきた歴史的事実があるにせよ一条約の締結に依ってしか、先住民からその占有地域を獲得することはできなかった⁶。

南北戦争の勝利者である連邦軍(北軍)最高司令官にして、戦後合衆国大統領(1869～77年)となったユリシーズ・S・グラント(Ulysses S. Grant)の政権は1869年、1880年代初頭に次のラザフォード・B・ヘイズ(Rutherford B. Hayes)政権で廃止されるまで推進されることになる、対先住民「平和政策(Peace Policy)」をうちだした。この政策は、先住民業務を管掌する連邦政府内務省下のインディアン業務局(Bureau of Indian Affairs)と、キリスト教団体を主体とする民間組織の協力の下、戦争行為によらないという意味で「平和的」に、広大な地域を自由に移動する西部各地の先住民集団をそれぞれ「保留地(reservation)」という一定区画内に定住させることを意図した。保留地では、若年層の先住民に学校で欧米文明教育を施し、「野蛮な民」と白人が定義する先住民をキリスト教徒化することを意図した。しかし保留地入居のもうひとつの主眼は、西部を「放浪する(roaming, wandering)」先住民に狩猟、採集、交易を放棄するよう説得し、その代わりに政府から食料、農機具、衣服等を供給すること



写真1 シッティング・ブル(左)。隣は義理の息子ワン・ブル(One Bull)

出典：Burnes, Ian. *The Historical Atlas of Native Americans: 150 Maps Chronicle the Fascinating and Tragic Story on North America's Indigenous Peoples* (Edison, New Jersey: Chartwell Books, 2009), 321.

によって、農耕民、ないしは牧畜民化することにあつた⁷。また同政策が合衆国にもたらす重要な余得は、これによって先住民が占有してきた西部フロンティアが空際化し、白人の手に広大な土地が無血で確保されることであつた。

既に 1868 年より合衆国議会は 50 万ドルを充当し、先住民保留地における食料や農具等供与のための資金とし、合衆国政府の派遣する使節が 67 年から 68 年にかけて、西部の諸先住民集団と上記政策に沿った内容の条約を締結しつつあつた⁸。合衆国は 68 年に、先住民の大集団スー (Sioux) およびアラパホ (Arapaho) ともいわゆる「第二ララミー条約 (Treaty of Fort Laramie)」を締結した。これによって合衆国は、騎馬で西部フロンティアをひろく移動し、また高い戦意を有し白人の進出に強い反発と抵抗を示すであろう強力な先住民集団との平和的関係の構築と、それに伴う土地取得をも達成しようとした。同条約では、現在のサウスダコタ (South Dakota) 州の西半分とワイオミング (Wyoming) 州の一部にあたる広大な地域に「大スー保留地 (Great Sioux Reservation)」を設定し (図 1)、主に年老いて狩猟に積極的に参加出来ない指導者たちにそこでの定住を同意させる条約に調印させた。この第二ララミー条約締結によって、老人、女性、子供を含む多くのスーが保留地内に居住するようになった。しかしその一方で、同条約への調印を拒否した者も数多く存在し、スーの一部であるハンクパパ・ラコタの首長のひとりであるシッティング・ブルも、その中に含まれていた⁹。

スーと呼ばれる先住民の大集団は、ラコタとダコタ (Dakota)、別称サンティー (Santee) / イースタン・スー (Eastern Sioux) とナコタ (Nakota)、別称ヤンクトン (Yankton) の三集団で構成されており、これら三集団はさらに下位の小集団—バンド (band) と呼ばれることが多い—に分割され、各バンドはさらに家族単位の、より細分化された小単位に分かれていた。ラコタについては、その下位のバンドとしてシッティング・ブルが属するハンクパパに加え、オグララ (Oglala)、ブラックフット (Blackfoot)、ブルーレ (Brûlé)、ミニコンジュー (Minneconj [o] u, Mniconjou)、サンズ・アーク (Sans-Arc [s])、トゥー・ケトル (ズ) (Two-Kettle [s]) の 7 つがあつた。

スーと同じく、クリー (Cree) やチピワ (Chippewa) 等、当時の北米大陸西部フロンティアに居住する多くの先住民集団は、このように数多くの小分子的な集団が適宜離合集散を繰り返していた。規模をアメーバのように変容させる先住民の大・中・小集団は、北米大陸に白人が後発的に合衆国、カナダという「国家」およびその「国境」を設定する以前から、両国家の西部フロンティアの大平原地帯、いわゆる「ボーダーランズ (borderlands)」を広域に移動しながら、狩猟、交易を行っていた。先住民はさらに、しばしば上記のような集団の枠さえも越え、交易関係や婚姻を通じて生まれた血縁関係で結節した親密なネットワークをも構築していた。例えばクリー、チピワにアシニボイン (Assiniboine)、ネズ・パース (Nez Percé)、メイティ (Metis) を加えた先住民集団は、緩やかでありながらも堅固で巨大な連合を構成し、これを「ニヒユ・プワ (Nehiyaw Pwat)」と自称していた¹⁰。

スーの内、もともと狩猟、採集と農業を併用していたダコタやナコタに比し、ラコタは食料源としては勿論のこと、衣服や生活用品としても利用できるバッファロー (アメリカバイソン) の狩猟への依存度が高かつた。このことから、狩猟を主宰する男性によって構成される血気盛んなラコタの戦士層には、保留地入居がもたらすボーダーランズ上の自由な移動による狩猟を放棄し、生活空間を制限される中で農耕や牧畜という馴染みのない生計手段に移行することに、大きな反発を覚える者が多かつた。

合衆国はこれらの者たちへの対策として、第二ララミー条約で保留地の西側から南側におよそその二倍におよぶ広大な地域を「(ラコタの合衆国に対する) 未割譲地 (unceded territory)」とし、保留地を自由に出て狩猟を行うことを許す妥協的条項を付したのであつた (図 1)。シッティング・ブルのハンクパパ・バンドの多くも、これ

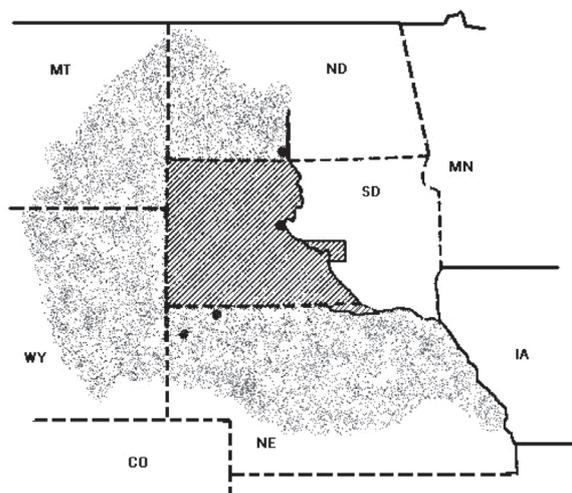


図 1 「大スー保留地」(斜線部分)と「未割譲地」(網掛け部分)
※黒点は内務省インディアン担当官の事務所; 点線は現在の州境界 (MT: モンタナ、ND: ノースダコタ、NE: ネブラスカ、SD: サウスダコタ、WY: ワイオミング等)

出典: <http://www.republicoflakotah.com/tag/great-sioux-war/>
(accessed Oct. 21, 2018)

らのいわゆる「保留地外インディアン (Off-reservation Indians)」に含まれていた。そしてこの条項が、この後保留地に否定的なこれらの先住民と合衆国との間に戦争をもたらすことになるのである¹¹。

2 「ブラック・ヒルズのための戦い」とシッピング・ブル追討

続く第2節では、「平和政策」に基づく保留地入居が、前節で述べたボーダーランズの先住民社会の在り様を著しく損なうものであったこと、それにもかかわらず合衆国が軍事的圧力によって保留地入居を強要したことが、シッピング・ブルも参画した戦争と、それに続く彼の集団の追討へと導かれていく過程をみる。

空間の限定された保留地で従来の自由移動と狩猟を放棄し、馴染みのない農耕や牧畜に従事することを拒否する者は、保留地外で大部の時間を過ごし移動しつつ、白人を侵略者として敵視し、しばしばこれに襲撃を加えた。「平和政策」を推進する合衆国は、これらの先住民をキリスト教を拒む「背教的」で、「敵対的」な「略奪者」とみなし、その政策名に反し、南北戦争を経て強大化した陸軍騎兵隊を投入し抵抗を破砕した後、保留地への入居を強いた。この結果、「平和政策」の施行間もない1870年代前半からはやくも、西部各地の先住民集団との間でいわゆる「インディアン戦争 (Indian Wars)」が多発することになった¹²。

西部フロンティアの他の先住民保留地と同様に、大スー保留地では農耕、牧畜で生計を立てられるようになるまで支給される約束になっていた食料や衣服の供給が十分に行われなかった。その理由の多くは、保留地を管掌する合衆国官吏と契約商人の結託により、腐敗した食料や、質の低い、あるいは数の少ない物資の納入によって割当予算の横領行為が行われたためである。この結果、保留地で狩猟を放棄せざるを得なくなり、その一方で馴染みのない農耕、牧畜への速やかな移行もできずにいる、年配、女性、年少者を中心とする先住民は生計の道を閉ざされ、政府からの僅かな、質の悪い支給物に依存しながら、貧民化していった。このような先住民社会の急激な変容と惨状をみて、「保留地外インディアン」はますます保留地への忌避感情と白人への敵意を募らせた。

事態を更に悪化させたのは、1874年に大スー保留地の西部にあるラコタの聖地ブラック・ヒルズ、ラコタ名パパ・サパ (Papa Sapa) で金鉱が発見されたことである¹³。ブラック・ヒルズに殺到した多数の白人からは、グラント政権に同地域をスーに割譲させ合衆国領とするよう求める声が高まった。第二ララミー条約で白人の侵入が禁じられた筈の保留地内、しかも聖地に無断侵入し採掘を行なう白人に、保留地外のラコタ戦士は強く反発し、白人に対する襲撃が各地で頻発した。かような敵対行動を止めさせるべく、合衆国政府は75年12月にこれらの「放浪する」「敵性」先住民に対し「未割譲地」の廃止と、翌年1月末日までの保留地出頭を布告した。しかし「保留地外インディアン」はこれに応じなかったばかりか、逆に保留地内の者が多数これに合流したことで、先住民の戦意はいやがうえにも高揚した。史上「スー戦争 (Sioux Wars)」と呼ばれる戦争は合衆国とダコタ、ラコタの間で1854年から複数回行われたが、中でも最も有名な「ブラック・ヒルズのための戦い」が76年に勃発したのは、以上のような経緯による。そして同戦争はこの年、シッピング・ブルの名を白人の間に広めることになる「リトル・ビッグホーンの戦い」、さらにそれに続くシッピング・ブルらの追討、彼の統率する集団のカナダ亡命に導かれることになる¹⁴。

76年6月、出頭しようとしないう「保留地外インディアン」を捕捉し保留地に連行すべく、合衆国陸軍はラコタを東、西、南の三方向から包囲する「ビッグホーン作戦 (Bighorn Campaign)」を発動した。進撃する各軍の前途にあるリトル・ビッグホーン河畔には、ラコタの各集団と、やはり狩猟を主たる生計手段とする同盟者シャイアン、その他の先住民集団数千人からなる、大野営地があった。これは当時の西部フロンティアにおける、最大規模の先住民連合であった¹⁵。

この時カスターの第7騎兵隊は、東から接近する軍の先鋒をつとめていた。1876年7月5日、先住民の大宿営地を発見したカスターは後続軍を待つようにとの命令を無視し、明らかに数において勝る先住民に対する攻撃を開始した。この「リトル・ビッグホーンの戦い」の間、シッピング・ブルは野営地内に留まり主に老人や女性、子供の保護に努めた。このため宿営地の横を流れるリトル・ビッグホーンの川向うの丘陵地で行われ、カスターの第7騎兵隊主力が先住民の逆襲によって包囲され全滅に至った戦闘そのものに、彼は参加していない。しかし合衆国の世論は戦後、3倍から10倍ともいわれる圧倒的な戦力差にも関わらず攻撃を強行し、必然的に全滅に至ったカスターの愚かな指揮を糾弾することなく、彼と第7騎兵隊将兵は悲劇の英雄に祭り上げられた。これとは逆に、

ラコタ以外の先住民からも敬意を払われていたシッティング・ブルがこの戦いを指揮した人物とされ、建国百周年を祝う合衆国に恥ずべき敗戦をもたらした最大の戦犯とみなされることになったのである¹⁶。

3 シッティング・ブルのカナダ亡命まで

第3節では、「リトル・ビッグホーンの戦い」後1年近く国内で合衆国軍から逃れ続けたシッティング・ブルの集団が、最終的に米加国境を越えるに至るまでの経緯と、そこから見いだせるシッティング・ブルのカナダ亡命の意味について考察する。

「リトル・ビッグホーンの戦い」後、合衆国軍は保留地入りを拒み西部フロンティアを移動する先住民集団を捕捉すべく、その追跡を一層強化した。1876年の秋から翌年にかけての冬、当時の常識では戦闘行為が中止される厳しい寒気の中も、先住民の追討は継続して行われた。各地のラコタ集団は発見され次第攻撃され、食料や生活物資を置き去りにして急ぎ逃げなければならず、19世紀を通じて北米大陸上でその生息数を減じこの時期絶滅の危機にあったバッファロー¹⁷の狩猟や、宿営地で冬を過ごすこともままならず、寒気の中を移動し続けることを強いられた。これまで経験したことのないかような逃亡生活で飢餓と疲弊状態に陥った先住民は次々に投降し、保留地に入ることを受け入れていった。

しかしシッティング・ブルの集団を含む一部の先住民は、それでもなお大スー保留地の北西の、今や北米大陸でバッファローの群れがかろうじて残る場所となったモンタナ準州 (Montana Territory)¹⁸ で、合間に狩猟を行いつつ逃避行を続けた。地域白人住民は、これらの保留地外に存在する先住民に危機感を抱き、当時の合衆国で最も悪名高き敵対インディアンであるシッティング・ブルを恐れ、保護を軍に盛んに要求し、これに合衆国東部の世論も同調した。モンタナの新聞は、(現実にはこれほどの数は存在していなかったが) 1万人もの「保留地外」ラコタをシッティング・ブルが引き連れてカナダに一旦避難しようとしており、そこで銃弾薬を入手し英気を養った後、同国を根拠地に再びモンタナを襲うのではないかという懸念を述べた。合衆国連邦議会は、モンタナ準州内のシッティング・ブルの活動地域、イエローストーン (Yellowstone) 河流域に二つの軍の砦を建設することと、騎兵隊員 2500 名の増員を認めた¹⁹。

その一方で合衆国軍は、大スー保留地内の先住民から銃を没収し、武装解除した。これには「平和政策」の眼目である先住民の農耕、牧畜民化推進のために狩猟手段を取りあげるという意味合いと共に、保留地を脱出し逃亡中の集団に合流して武力抵抗に加わるのを防止するという目的もあった²⁰。

1876年10月、降りしきる雪の中追跡を続ける合衆国陸軍ネルソン・A・マイルズ (Nelson A. Miles) 将軍の部隊は、今や1000名程度に増えたシッティング・ブルの集団を捕捉した。シッティング・ブル側の希望により、マイルズとシッティング・ブルはラコタ戦士と騎兵隊員が遠巻きに見守る一触即発の緊迫した状況下、お互いに少数の側近を伴い野外で対峙し会談を行った。マイルズはこの歴史的な会談で交わされたシッティング・ブルとの対話を記録に残しているが、そこに記された二人のやり取りには、自由な移動と狩猟を禁じ保留地入居を求め、従わぬ先住民を敵対的とみなす合衆国先住民政策と、それに対し生存の危機を感じ取り、従来のボーダーランズ上の生活の維持を望む先住民との、相容れない相克が如実に示されている。

マイルズは、シッティング・ブルがもともと白人に激しい敵意を抱き、戦争を望んだ(がゆえに保留地の外を逃げ続けているのだ)と非難した。シッティング・ブルはこれを否定し、率いる民のため狩りをしバッファローの肉を得ることで自分の目的だと返答した。そして、白人が自分たちを追い詰めたことこそが戦争の発端となったのであり、西部の土地はこれほど広大であるのに、何故自分たちを放っておいてくれないのかと反論した。マイルズはシッティング・ブルに、いつの日か狩猟を止めねばならないこと、保留地こそシッティング・ブルが居るべき場所であると説いたが、シッティング・ブルは若者、女子供、老人を見捨てるようなことはしないと応じた。そして、何故保留地での生活を受け入れないのかという問いに対し、自分は保留地で「物乞いとして」生きるつもりはないと辛辣に述べた。このように会談は、時に険悪な様相を呈しつつ、平行線上の議論に終始したまま物別れに終わった。その後先住民は素早く退去したため、軍は再び追跡を開始した²¹。

以上の発言において、シッティング・ブルが合衆国との抗争と逃避行の要因に「わが大地」を奪われたという事由を挙げていないことには、注目する必要があるだろう。あくまで先住民の狩猟放棄と保留地入居を要求する

マイルズに対し、保留地の同胞からの情報を得て先住民の本来の在り様を破壊する保留地の悲惨な現実を明らかに認識していたシッティング・ブルは、ボーダーランズの本来の生の維持、すなわち自由な移動と狩猟を強く主張しているのである。

またカナダでの後日談ではあるが、シッティング・ブルはカナダ当局に対し、自分は戦争のせいでここに来たのではなく、(保留地に入居すれば)アメリカ人は小麦粉を与えるのみで銃や火薬を取り上げるため、自分たちは無の存在と化してしまうからであると述べている。さらに1881年にシッティング・ブルは、若者たちが保留地で食料をもらうのをもらうことは良くないことで、それは若者たちを怠け者にしてしまうと、自分がこれまでに目にしたあらゆる保留地でインディアンは戦士でもなく、かといって白人の農民にもなりきれていない、見下げ果てた存在と化してしまっていたと述懐している²²。カナダでは、自分の処遇を巡って交渉を重ねる米加両国が自分を「アメリカの」インディアンと規定していることを知った際、シッティング・ブルは嘲笑し、自分はアメリカのインディアンであるのと同じ程度にカナダのインディアンであると言い放ったという。以上の発言こそまさに、合衆国(とカナダ)が規定し先住民に強要する「国家」「国境」そして「保留地」といった枠組みに対するシッティング・ブルによる揶揄的な否定、あるいは拒否であり、自由移動に立脚するボーダーランズの生の主張であろう²³。

一方合衆国軍はシッティング・ブルの集団をモンタナ準州内で追い続けたが、その主たる企図はシッティング・ブル集団を討伐することにあつたのではない。それはあくまで先住民を保留地へ入居させるべく説得することであり、それ故にこそシッティング・ブルはバッファローの残存するモンタナに長く留まり、狩猟を続ける努力を払うことができた。カナダへの移動がマイルズとの会談の7か月後、「リトル・ビッグホーンの戦い」から約1年という期間を経た後であることから、それは明らかである。ゆえにシッティング・ブルは、ボーダーランズの生を継続すべく、むしろ自発的、主体的に国境を越え、カナダへと向かったと考えるのが至当であろう。

ラコタが主たる生活圏とした聖地ブラック・ヒルズを含む「わが大地」は確かに奪われ、多くが失われた。しかしシッティング・ブル集団は大陸で最後に生き残るバッファローを追いつつ、ボーダーランズ/合衆国西部フロンティアの広範な地域を移動し続けることを目指した。カナダ亡命も含め、彼の行動は単に軍に追討されたための受動的な行為としてのみ解釈されるべきではなく、「国家」や「国境」を超越した広大な大地上における自由な移動という意味において、先住民の本来的なボーダーランズの在り様からして極めて能動的かつ主体的行為であったという理解も可能なのである。

1877年5月、シッティング・ブルの率いる300人のハンクパパ・ラコタを中心とする集団は、モンタナ準州から米加国境を越え、カナダに入った。シッティング・ブルらは、国境を越えた先の、現在のカナダのアルバータ、サスカチュワン両州を跨ぐサイプレス・ヒルズ(Cypress Hills)近郊に宿営し、81年までその地に留まった。その前後には、オグララ・ラコタの首長のひとりスウィフト・バード(Swift Bird)、サンズ・アーク・ラコタの首長のひとりスポッテッド・イーグル(Spotted Eagle)が統括する他の先住民集団や、先に述べた「ニヒユ・プワ」の一員であるネズ・パース等、シッティング・ブルと同様にボーダーランズに生き、それゆえに合衆国の先住民に対する強圧的、破壊的統治の手段となった保留地入居を肯んじ得なかったその他の先住民も、漸次カナダに入国した。これらアメリカからやって来た先住民集団の数は、最終的に約4000～5000人にまで膨れ上がることになる²⁴。

おわりに

北米大陸のボーダーランズに生きる数多くの先住民にとって、ヨーロッパからの白人到来による西欧国家の設立と統治以降強要されることになった、保留地というはるかに矮小化された枠組み「内」に包摂される生の許容は、極めて受け入れがたいものであった。また受容したとしても、短期間でそれに順応することは困難であった。加えて、白人社会の利害を優先するご都合主義的な政策の運用は、保留地における先住民社会の機能不全化に拍車をかけることになった。

その中でシッティング・ブルの集団は、保留地の「外」で、あくまでボーダーランズ世界に生き続ける途を選んだが故に、最終的にカナダ亡命を執行した。しかしその他多くのボーダーランズの生の継続を望む先住民は、国家に敵対する勢力として打倒され、最終的に保留地入居を受容せざるを得なかった。本稿では射程が及ばなかつ

たものの、このことこそ、合衆国西部各地の保留地の多くで現在もおおしく先住民社会の混乱と破綻、それがもたらす絶望や貧困といった悲惨な現況を生み出すことになっているということを付言しておきたい。

またその後のシッティング・ブルも、1881年7月に在住約4年に及んだカナダを去り、米加国境を越え合衆国ダコタ準州(Dakota Territory)ビューフォード砦(Fort Buford)で同行の先住民187名と共に降伏した。彼は自分の持つライフルを当局に明け渡し、保留地への入居を受け入れることになる²⁵。

カナダ亡命後事態がここに立ち至るまで、シッティング・ブルら「アメリカ」の先住民集団に対しカナダ政府はいかに対応し、またボーダーランズに生きる「カナダ」の先住民はこれにどのような反応を示したのであろうか。また合衆国は、外国に逃亡した「アメリカ」の先住民集団をその間、どのように処しようとしたのだらうか。以上の問題は、「リトル・ビッグホーンの戦い」とカナダ亡命によって国際的にもひろくその名を知られるようになった著名な先住民指導者を筆頭に頂く亡命先住民集団を巡り、共に「国内」先住民の統治という問題を抱える合衆国とカナダ(およびイギリス)間で行われた外交交渉を含め、さらなる検討を行う必要があるだろう。そこからは、シッティング・ブルが最終的にカナダを去り合衆国で降伏し、彼が否定し続けた保留地入居を受容するに至った意味についても明らかにすることができよう。以上の問題提起については、稿を改めて論じたい。

¹ 北米大陸の先住民はしばしば「インディアン」と呼ばれるが、やむを得ない場合を除き、本稿では「先住民」という名称で統一する。

² 彼はしばしばカスター「将軍」と呼びならわされてきたが、実際にはその階級は「中佐」であった。

³ 騎兵隊(cavalry)とは当時の西部フロンティアで主力として運用された騎馬による軍部隊である。なおカスターの命により本隊から分離し、ラコタ、シャイアン宿営地への別方面からの攻撃および本隊の後備に配置された別働隊は、戦死者を出しながらもかくも生還したので、第7騎兵隊は厳密に言えば巷間いわれるように「全滅」したのではない。Spencer C. Tucker, *The Encyclopedia of North American Indian Wars, 1607-1890* (Santa Barbara, California: ABC-CLIO, 2011), 445.

⁴ J・コスターが日本の読者のために書き下ろした『この大地、わが大地—アメリカ・インディアン抵抗史』(三一書房、1977年)の書名に示されているように、先住民が白人に奪われた土地を「わが大地」と表現することがある。

⁵ Robert M. Utley, "Indian-United States Military Situation, 1848-1891," in *Handbook of North American Indians Volume 4: History of Indian-White Relations*, ed. by Wilcomb E. Washburn (Washington: Smithsonian Institution, 1988), 176; Utley, *The Lance and the Shield: The Life and Times of Sitting Bull* (New York: Ballantine Books, 1993), 180; Stanley Vestal, *Sitting Bull: Champion of the Sioux* (Norman: University of Oklahoma Press, 1932), 212. この他、シッティング・ブルの研究書には枚挙に暇がないが、代表的なものとして挙げ得るのが、Grant MacEwan, *Sitting Bull: The Years in Canada* (Edmonton: Hurtig Publishers, 1973); Joseph Manzione, *I Am Looking to the North for My Life: Sitting Bull 1876-1881* (Salt Lake City: University of Utah Press, 1991); Bill Yenne, *Sitting Bull* (Yardley, Pennsylvania: Westholme, 2008) 等である。

⁶ 「マーシャル三大判決」による先住民の合衆国内主権については拙著『先住民ネーションの形成』(ナカニシヤ出版、2016年)8~9頁; 拙稿「自治問題—連邦、州と区別される「第三の主権」」阿部珠理編・著『アメリカ先住民を知るための62章』(明石書店、2016年): 61~65頁を参照。

⁷ 先住民集団の全てが狩猟を主たる経済としていた訳ではなかったが、本稿で取り上げるラコタ、シャイアンをはじめとする当時合衆国西部フロンティアに居住する多くの先住民は、騎馬によるバッファロー狩猟を中心とする生計をたてていた。

⁸ また「1871年インディアン歳入法(Indian Appropriation Act of 1871)」によって建国以来の先住民集団との条約締結も廃止され、以後は法的により下位レベルの合意(agreement)というかたちで約定が交わされるようになった(ただし同法以降もそれまでの諸条約は有効とされている)。U. S. Statutes at Large, 16: 544-70.

⁹ "Appendix: Report of the commission Appointed to Obtain certain Concession from the Sioux," in Department of the Interior, Office of Indian Affairs. *Annual Report of the Commissioner of Indian Affairs, 1876*; Utley, "Indian-United States Military Situation, 1848-1891," 175.

¹⁰ 拙稿「難民化する先住民、創出される保留地—19世紀末~20世紀初頭北米ボーダーランズにおける棄民化された先住民の合衆国包摂」大阪大学文学会『待兼山論叢 史学編』第51号(2017年): 27~53頁。

¹¹ Donald L. Fixico, *Indian Treaties in the United States: An Encyclopedia and Documents Collection* (Santa Barbara: California: ABC-CLIO, 2018), 346-47; C. Joseph Genetin-Pilawa, *Crooked Paths to Allotment: The Fight Over Federal Indian Policy after the Civil War* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2012), 68; Hagan, "United States Indian Policies, 1860-1900," 54; Charles J. Kappler, *Treaties*, Vol. II of *Indian Affairs: Laws and Treaties* (Washington: Government Printing Office, 1904), 998-1007; Utley, "Indian-United States Military Situation, 1848-1891," 175.

¹² Francis Paul Prucha, *The Great Father: The United States Government and the American Indians*. Vol.1 and 2. (Lincoln: University of Nebraska Press, 1984), 501-33.

¹³ この時金鉞を発見した調査隊を護衛した軍がカスターの部隊であった。

¹⁴ Utley, "Indian-United States Military Situation, 1848-1891," 175.

¹⁵ Ian Anderson, *Sitting Bull's Boss: Above the Medicine Line with James Morrow Walsh* (Surrey, BC: Heritage House, 2000), 13-14; Manzione 3.

¹⁶ Beth LaDow, "Sanctuary: Native Border Crossing and the North American West," *American Review of Canadian Studies* 31 (2001): 3; Uteley, "Indian-United States Military Situation, 1848-1891," 176.

¹⁷ 北米大陸のバッファローの野性の個体は、合衆国モンタナで1880年代にほぼ絶滅したとされている。

¹⁸ 1889年に州に昇格。

¹⁹ Manzione 17, 22.

²⁰ Manzione 17.

²¹ Manzione 24-25; Norman E. Matteoni, *Prairie Man: The Struggle between Sitting Bull and Indian Agent James McLaughlin* (Guilford, Connecticut: Twodot, 2015), 100-101; Vestal 195-98.

²² Virginia Irving Armstrong, ed., *I Have Spoken: American History through the Voices of the Indians* (Athens: Swallow Press, 1991), 116; MacEwan 7; Mark Diedrich, ed., *Sitting Bull: The Collected Speeches* (Rochester, Minnesota: Coyote Books, 1998), 97-98.

²³ MacEwan 7; Diedrich 97-98.

²⁴ Department of the Interior, Office of Indian Affairs, *Annual Report of the Commissioner of Indian Affairs, 1876*; Uteley, "Indian-United States Military Situation, 1848-1891," 16; Mark Felton, "The Sioux Hegira in Canada 1876-81: The Layering and Framing of Aboriginal Identity," *British Journal of Canadian Studies* 19, no. 1 (2006): 47; A. G. Irvine, (Assistant Commissioner, N.W.M.P.) to R.W. Scott (Secretary of State), Fort Benton, May 25, 1877. Quoted in Fraser J. Pakes, *Sitting Bull in Canada, 1877-81* (London: English Westerners' Society, 1978), 4; Diedrich 98.

1; "Expansion: Canadian Indian Treaties and Sitting Bull, 1874-81," *Macro History and World Timeline*. <http://www.fsmitha.com/h3/h46-canada4.htm> (accessed March 23, 2018)

²⁵ Ron Papandrea, *They Never Surrendered: The Lakota Sioux Band that Stayed in Canada* (La Vergne, Tennessee: Lightning Source, 2009), 1.